

研究の窓

現代の家族変動をどうとらえるか

去る2月7日「低出生社会の家族と社会保障」を主題とする当研究所のシンポジウムが開かれ、知的にたいへん刺激的な報告とコメントが提供されたことは記憶に新たなところである。多くの有益な発言のうち、シンポジウム閉会の直前に富永健一氏がフロアから行った発言は、私にとくに多くのことを考えさせる手がかりとなった。

富永氏の見解の大意は、一般に社会集団の形成と維持の基礎には人間の欲求があるのだが、家族はゲマインシャフト的な社会関係を求める人間の欲求に基礎づけられており、この欲求は消滅しないと考えることができるので、今日起きている現象は女性のパワーが高まってゆく過程で生じた一種の行き過ぎであって、また揺りもどしがあるものと思う、ということであったと私は理解している。

コメンテーターの1人、小川直宏氏が、最近の出生率の低下は9割までが晩婚化によるのであって、有配偶出生率の低下によるところは僅かであることを指摘し、低下の大きさを額面どおり受け取ってこれに過敏に反応することを牽制する一方、晩婚化はなお進行する勢いをもつこと、晩婚化にとどまらず生涯未婚率が高まると予想されることに言及して、出生率の動きを左右する要因に新しい展開がありうるとの印象を与えた、と私は理解したのである。富永氏の発言は、小川氏のコメントのうち上記にまとめた部分に比較的良好に対応しているように、私には思われた。

富永氏のいう「ゲマインシャフト的な社会関係」とは、かつては生活保障をしよう関係に重点が置かれたが、今日では、報告者の1人、大澤真知子氏の表現を借りるなら、できるだけ時間や活動をシェアしようとする心の通いあった関係、を意味するのであろう。

女性の高学歴化、就労による経済的自立、これらによる価値観の変化は、あい携えて上記の意味でのゲマインシャフト的な社会関係の意義に目覚めさせ、かくて晩婚化を推進していると考えることができる。のみならず、この関係の形成のためには、伝統的な家族という形にとらわれない女性も出現しているのではないだろうか。予想される生涯未婚率の上昇には、この露頭も含まれるとみてよいだろう。

最近の欧米について報告されている家族と婚姻の脱制度化・契約化の傾向は、日本ではまだその兆候すらあらわでなく、当分の間対岸の火事視していてよいのかもしれないが、気のつかぬ間に火の手がまわることもありえぬことではない。しかし、それはとくに憂慮すべきことではなく、幸福追求の選択肢がふえることにつながるのではないだろうか。

森岡清美

(もりおか・きよみ 成城大学教授)